

別府における

算術教育(1)

別府大学短期大学部

恒松 栖

一 別府の特色ある学校

1 はじめに

近年、情報化が一段と進み、茶の間に居ながらにして国内の出来事は勿論のこと、外国で今起きている世界各地の様子が手に取るようにわかる。このことは、「情報化社会」の進展によってもたらされたものとして喜ばなければならぬ。

そうしたことから、政治や経済を初めとして、教育にかかわる様々な情報が即座に家庭や地域にもたらされることとなり、学校の経営や運営面でも多くの影響を受けている。生きた情報が多くもたらされることによって、地域に密着した学校の特色がやや薄れ、経営や運営面で

画一化したり平均化したりすることが生じてきたように思われる。

学校運営や経営状況は、学校教育を管轄する文部科学省や教育委員会の基本的な教育理念が大きくかかわって行くことは当然である。しかし、その枠の中で学校を平均化する

ことは、

公教育の質をそれなりに維持するこ
とにはなっ
たかも知
れないが、
没个性的
な学校が
誕生する
こととなっ
たように
思える。



▲《写真…南小学校玄関付近
(市内で唯一の木造校舎の南小学校)》

このことを克服し、特色ある学校創りがここ十数年前から叫ばれるようになり、教育環境を生かしたり教育内容を新たに創造したりする試みがなされていることは周知のとおりである。

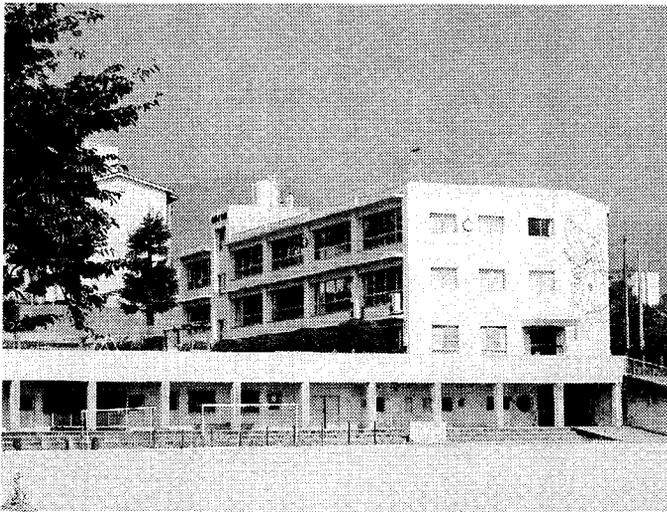
2 学校の始まりと学校の特徴

別府市内には、明治の初めに開校した学校から大正・昭和と地域の広がりや人口の増加に伴って順次学校が新設されたり統廃合されたりして、小学校が一七校（私立校一）、休校二校（小学校一、分校一）がある。また、中学校は九校（私立校一）、幼稚園は二五園（市立一七、私立七、県立校幼稚園部一）がある。

明治年間に誕生した小学校は、旧別府と浜脇地区の北小・南小、石垣村の石垣小・南立石小、朝日村の朝日小、御越（亀川）町の亀川小、市街地周辺部の天間小・東山小・枝郷分校・山の口分校（明治から昭和初期の間は山ノ口尋常小）・湯山分校など八校三分校であった。また、大正から昭和前期にかけて浜脇小・野口小・西小の三校が、昭和後期になって明星小（私立）・青山小・境川小・上人小・鶴見小・春木川小・緑丘小・大平山小学校が相

次いで開校した。

中学校は、昭和二十二年に第一（山の手）、第二（青山）、第三（中部）、石垣、亀川、朝日、天間、東山中学校でスタートし、昭和二十四年に山の手中学から第五（浜脇）中学校、石垣と亀川が第四（北部）中学校として再編された。そして、昭和五十八年には中部と北部から鶴見台中学校を誕生させた。



▲《写真…明星小学校全景
（県下唯一の私立小学校の別府大学明星小学校）》

別府市内に開校した学校はそれぞれに学校の歩みに併せて学校環境や学校研究で特色ある学校が創られているが、

市内は勿論、県内や県外にまで名を成している名門校と云われる学校も少なくない。代表的な特色校を上げてみると次のような学校が知られている。

小学校に限定すると、大正から昭和にかけて算術(算数)教育の推進校として南小学校があげられる。戦後にいたって道徳教育の北小、理科教育の南立石小、国語教育の青山小・石垣小、体育の大平山小、音楽の西小・石垣小・上人小、統計教育の境川小、放送教育の亀川小、僻地教育の東山小・天間小・湯山分校、県下唯一の私立小学校としては明星小学校などがある。

二 大正・昭和前期の特色校

1 南小学校のはじまり

別府市内の特色ある学校の中で、大正のはじめから昭和十年代にかけて数ある小学校のうち、際立った特色校として取り上げられるのが南尋常小学校である。それは「約説的教育」と云う教育思潮を新しく創生し、算術教育の教育実践を中核に据えて多くの成果を収め、市内は勿論県内を初めとして、国内の至るところにその主張を

広げて行ったのが南尋常小学校である。

別府南尋常小学校は、明治五年学制がしかれ全国の津々浦々に順次学校が開かれた明治七年、海門寺に別府・浜脇両村の児童を収容する「共立別府学校」として誕生した。その後、明治十三年に別府学校は別府・浜脇共立を解き、別府学校はそのままに、浜脇学校を浜脇村八六番地に設置したのが南小学校の始まりである。

開校した学校は池田直恭(校長代理)と助教の津久井善平、管理者の山田三郎の三名によってスタートした。明治十四年には訓導一名、助教三名の四名となり、児童も二一四名を数えた。明治十七年に初代の校長として富田武馬(たけま)を迎え、文部大書記官等の学校巡視が度々行われていた。

明治二十年二月二十五日には、時の文部大臣森有礼(ありのり)が九州地方を巡回し、その折に学校の各教室を臨視(参観)し、大臣自ら算術の暗算問題を数題出して子どもたちの実力を試した。そして受け持ちの教員に対して、学科につき演舌(指導)した。当時の就学対象児童数は五二四名、実際に就学しているのは三〇〇名、就学率は五七・三%に過ぎなかった。

2 女子校から浜脇小を独立させる

学校は、開校当時、児童数が二〇〇名ほどであったが、急激に増加するということなく推移し、明治三十四年に幼稚園を付設してから三五〇名を越えた。明治四十一年義務教育年限の延長と共に、別府高等小学校を解散して南・北尋常小学校に高等科を併置することとなり、校名を南尋常高等小学校と改めた。

さらに、南小学校には第一学年の男女と二年生以上の女子が学ぶ女子校としてスタートし、児童数も七九〇名を数えることとなった。一方、北小学校は、一年生の男女と二年生以上の男子を収容する男子校となった。

こうして明治四十四年には、一〇〇〇名を越える大規模校に発展した。児童数が一二〇〇名を越えた大正四年に着任したのが吉良荒太校長（南小学校第十三代）である。さらに一五〇〇名を越えた大正九年には、高田亀市校長（第十四代）が着任した。同年の学校沿革史には、次のように学校の様子が記されている。

高田校長は吉良校長の本校創設実施した「約説的

教育主義」を継承し、爾来、倍々研鑽を重ね実績悠悠挙がり、文部省より督字官あるいは図書監修官等度々視察調査するところなり、また、学習院教授をはじめ、全国小中学校等各方面より視察参観するもの数千人に上れり。

大正十一年には児童数が一九〇〇名を超えたことから田島台（蓮田）分教場六教室を開き、翌十二年には二階建一二教室を落成させた。そして、大正十五年には男子六二名、女子一三八〇名、高等科二四三名で本校と分校に高等科を加えると、実に二二三五名のマンモス校となった。大正十五年には蓮田分教室を分離独立させ、然も女子校を男女共学の組織に編成替えし、一二〇〇名の学校として再出発した。

3 昭和十一年「約説的教育主義」を封印

昭和三年、別府市は単独の高等小学校を設立した。そのため高等科を分離し、南尋常小学校とした。その結果、一一六三名の学校となり男女比がほぼ同じ構成で推移した。昭和八年、高田校長が退職するまで一三年間にわたって学校経営に努め、名実ともに算術教育の実践校として

全国に南小学校の名を知らしめるとともに、教員の養成機関の拠点校としても多くの実践家を育てた。

昭和十一年、第十六代辻治六校長が着任するにいたっ

て、これ

までに南

校を拠点

校として隆

盛を極め

た算術教

育の方向

が大きく

転換する

ことになっ

た。その

ため、吉

良・高田

両校長時

代に醸成

された様々

な教育理

念や方法が払拭され、市内の他の小学校とほぼ同一の経営方向に塗り替えられた。それによって教育理念として創生され実践されてきた多くの教育財産が封印されてしまったようである。

4 「約説教育」を提唱実践した三名の先生

別府市立南小学校が『算術教育(算数教育)』の先進校として、全国的にも知られた特色あるすばらしい学校となるきっかけをつくったのが「吉良荒太・高田亀市両校長と河野三五郎を中核に据えた」先生方であった。

吉良荒太校長は、明治二十八年(一八九五)三月、大分県尋常師範学校を卒業し、南海部郡視学の在任中に南海部郡波当津分校を珠算日本一に導いたと云う実績の持ち主であり、「精悍熱烈」の有力校長であったといわれている。吉良校長は、当時の世界的な教育思潮の流れの中で「約説的教育主義」という新しい教育思潮を創生した。その教育思潮は、吉良校長の後任である高田亀市校長によって受け継がれ完成された。高田校長は明治三十年(一九八七)大分県尋常師範学校を卒業し、「温厚篤実」な人物で吉良荒太校長の二年後輩であった。南海部

郡視学、日田郡視学、東国東郡視学等吉良校長の後を追いかけるようにあゆみ、ついには吉良校長の後任校長として南小学校の校長を勤めた有力校長であった。

さらに、二人の校長に寄り添い「約説的教育」の実践を、算術教育を中核にしてすすめ確立したのが河野三五郎訓導であった。河野三五郎先生は、大分郡庄内町西庄内の清酒「千代鶴」の銘柄で酒造業を営む家の次男として明治十七年九月五日、八大兄弟の四番目として生まれた。家庭環境は西庄内で指折りの富農で、兄は庄内町の収入役を勤めるなど恵まれていた。検定によって先生になってから東庄内尋常小学校訓導、西庄内尋常小学校及び大分市別保小学校訓導をした後、大正二年四月別府南尋常小学校に訓導として赴任した。

以来、二五年間にわたって算術教育を中核にした南小学校の教育に没頭した。その実践成果は、算術教育の著書として出版され、算術指導の著名な実践家として、ひいては南小学校の名を算術教育の実践校として不動のものにした。三五郎先生は、南小学校の主席訓導（教頭）になった後、湯布院町の棉陰小学校（現湯布院町立湯布院小学校）の校長を最後に教職を去り、その後、昭和四



▲《写真…河野三五郎先生》

〇年に亡くなった。

5 河野三五郎訓導の足跡

河野三五郎先生は、明治四十三年から南学校に在職し、二五年間にわたって一訓導として算術教育に専念し、文部省の督学官や図書監修官をはじめ大学教授、各県視学官、訓導など全国各地から視察参観者が多く、その数は年間数千人に及び「南学校の算術教育」の質の高さと実践の成果が名をなしていた。

学校のあゆみを伝える『南小学校沿革史』によれば、算術教育の実践家の河野三五郎先生が活躍されたが、河野三五郎先生の存在やその教育思潮や実践成果について

残されたものは少なく、その実績を知る人も少ない。しかし、河野三五郎先生の著書として昭和二年刊『分数歩合の約説的進行による 私の算術教育』文教書院（一五版）、昭和三年刊『数理発展 算術補充問題集』南小学校出版（一四版）、昭和四年刊『私の算術作図研究』文教書院（一〇版）などがあり、各書籍ともに増刷に増刷を繰り返している。別府という一地方都市から全国に向けて書籍が送り出され、しかも全国に名を成したことは学校関係者はもちろんのこと、算数教育関係者にとっても注目すべきことである。

「約説的教育主義」と云う教育思潮は耳慣れない言葉であり知られていないが、三五郎先生の著書の序文には次のように記されている。

『…前略…千人ノ人間が千人ソレゾレニ違ッタ欠点ト同時ニ違ッタ美点ヲモツテイル。即チ個人個人ノ味ワイ、個人個人ノ魂ノ香リヲモツテイルハズデアル。一片ノ野ノ花ヲ見テ、ソノ驚異ニウタルル人デナケレバ真ノ児童ヲ看破ル事ハ至難デアルト信ズル。私ニ教育ノ方法ヲ教エル者ハ児童デアル。私ノ

読ムベキ参考書モ、マタ児童デアル。…略…』

叙上の見解は一人一人の考え方を生かしていく問題解決的学習の考え方に類似している。しかも、子どもの個性や心理に気配りしながら、子どもを主賓にする「自発的学習」・「児童の質問尊重」・「教師の案内者・監視者・助力者・判決者の役割」を大切にしている。この考えを南小学校の子どもとともに実践し、その成果を『約説的進行による「私の算術教育」』として著述している。

さらに『私の算術作図研究』『算術補充問題集』などの著書が、別府の町から全国に向け情報を発信した。吉良・高田両校長と河野三五郎先生を中心にした当時の南小学校教育は、郷土の生んだ算術・算数教育の先覚者たちであり、教育実践家であった。

このような学校現場に根を張り、地道に算数教育の実践を長年にわたってなされた教育実践家の存在を知ったとき、また算術教育が華やかだった昭和初期の様子が手に取るように分かったとき、こんなすごい学校が他にあったらどうかという感動を覚え、機会があれば先陣の先生方の研究実践の教育理論に触れてみたいと考えている。